第一席

土の下にあるもの

徳島文理高等学校二年（徳島県）
松本　治奈

戦争、コロナ禍といった深刻な世の中ではあるが、いつ命を奪われるか分からないという恐怖に怯えることも、明日の食べ物の心配をすることもなく私が学校に通い勉強できたり、茶道の稽古をすることができたりするのは当然、自分の力で手に入れたものではない。いいかえれば、生まれてくる国や家庭は自分の力でどうにかなるものではなく、ただの運だということである。今、私たちが暮らしている平和な国家や便利な社会はあってあたりまえだと思いがちであるが、そういうものは、自分とは別の誰かの『お陰』である。私たちは、社会の中で多くの人々の『お陰』に支えられて生きてきているわけではない。このことは誰しもが分かっているはずであるが、実際に身近にある『お陰』に気づけたり、感謝できたりしている人はあまりいないような気がする。

私がこのようなことについて考えるようになったきっかけは、先生のお話の中で「『お陰』は土の下にある」という言葉を耳にしたことである。この言葉の直接的な意味は、木や花などの植物が水分や栄養を吸収し、身体を支えることができているのは私たちの見えない土の下にある根の『お陰』であるということだ。だから、直接的な意味として先生の言葉をとらえるならば、美しい茶花を見て「きれいだなあ」と感じるだけでなく、「彼らには立派な根がありその『お陰』でこんなに素敵な花を咲かせることができた」と見えないけれど大きな役目を果たしているものに目を向けることも大切だと考えられる。しかし、この言葉が人間を植物にたとえて表現されたものだととらえることもできる。そうだとするとこの言葉の本質的な意味は、私たち人間は誰もが身近にいる見える人に加え、会ったこともないような遠くの国にいる人にさえも支えられているということになる。確かに、世界には私よりも小さい子ども達が満足のいく食事も与えられず一日中働いて作った食べ物を私たちは口にしている。しかし、自分が普段何気なく食べているものがどのようにして作られているものかと考える人はほとんどいないと思う。このように『お陰』というものは確かにあるけれど、意識しないと分からない、努力しなければ気付けないものである。

人は誰でも『お陰』がなければ生きられない。しかし、我々現代人は、日々の忙しさのために『お陰』の存在をし

ばしば忘れがちである。私も普段から『お陰』を意識しながら生活をしているわけではないが、私には日常から少しはなれて『お陰』について考える時間、感謝する時間がある。それが、畳の香りで満たされ、お点前をする音がかすかにきこえてくる茶室にいる時間である。だから、新しい情報技術が次々と開発され、便利になってゆくとともに目まぐるしく変化する社会を生きる私達にとって心を落ち着かせ、忙しい日々の中で見失っている『お陰』に目を向ける時間が必要だと思う。どんなささいなことにも目を向け、感謝の気持ちをもてる人が増えると世の中が平和になるだろう。そのために私は、少しでも多くの人に茶道のよさを広めていきたい。